

Irish Nationalism の問題

—Iris Murdoch の場合—

宮 井 敏

Iris Murdoch の第9作 *The Red and the Green* (1965) はそれまでの彼女のすべての作品がそうであったように、愛を主題とした入り組んだ人間関係に支えられた小説である。もっともこの作品が一連の系譜のなかできわだっているとすれば、それはいままでの abnormal な愛の諸相の追求のなかでも、徹底して incestuous な愛の展開に向けられていること、および背景となるべき situation が従来の閉鎖的な密室の状況ではなくてアイルランドの独立運動という動きとひろがりを持つものであり、従ってそれは story の展開のために単に便宜上撰ばれたもの以上の意味を Anglo-Irish である作者に対して持っていること、などが考えられよう。

生きて活躍する9人、作中ですでに亡くなっている9人、あわせて18人の人間が、2組の兄妹相互の結婚、2組の再婚、2組の求婚によってからみ合っている複雑さはふつうの家系図でも一寸現わせない程であるが、アイルランド貴族、イギリス陸軍将校、破戒神父、アイルランド義勇軍大尉などを含むこの Anglo-Irish の一族が相互に入り乱れたまま、意識、宗派、性別、職業、年齢に従って、アイルランドそのものに対して銘々がさまざまな距離を保って位置付けられているのである。

ところでこうした Anglo-Irish の人々の Ireland に対する national consciousness というものは、宗派——Catholic か Protestant か、階級——地主か労働者か、人種——Irish か English か、地理——南 Dublin か北 Belfast か、政治——conservative か radical か、といった直線的な二元論的対立の

中でとうてい把握出来るものではなく、こうした factor が複雑に重なり合っていて、その中間のさまざまな折衷的態度をも含めて、それが独立運動という具体的な実践面での動きの中のそれぞれのセクトへの積極的参加から精神的支援に到るさまざまな commitment として現われて来るわけである。

加うるに、この1916年 Easter Rising 前夜のアイルランドの状況というものには第一次大戦の勃発によってアイルランド自治法の実施が凍結され、さらにイギリスの参戦をめぐって徴兵法がアイルランドにも適用されるかどうかという、長くまた入り組んだ英蘭関係の歴史の中でも、最も錯綜し緊張した際のものであり、しかもこの蜂起の悲劇的な挫折に対する評価をめぐって個々の人々の national consciousness がつよく増幅され両極化するという時期を背景としているのである。

Epilogue に姿を現わす名前を示されていない Frances のイギリス人の夫と息子をのぞいて、作中で生きて動きを見せる9人の人物は、1人の English と8人の Anglo-Irish、(意識においては3人の English と3人の Irish と3人の Anglo-Irish)、4人の Catholic と5人の Protestant、4人の男性と5人の女性、4人の若者と5人の中年という構成を示すが、同時に彼等ははっきりした Unionist の Hilda と Nationalist の Pat を左右の両極として、その間にさまざまなニュアンスの違いをこめて位置している。すなわちイギリス陸軍将校としての立場からも Nationalist ではありえない Hilda の一人息子 Andrew、Catholic ではあるが母性と平和主義の立場から Nationalism に反対する Hilda の義妹 Kathleen の二人が Hilda より、Pat と同じくらい radical なその弟 Cathal と、だらしのないアル中の破戒僧ながらそのやみ難いアイルランドへの愛着から最後は銃をもって立つその義父 Barnabas、女性でありながらあそびの精神から参加する実在した Constance Markievicz 夫人にもなぞらえられる Millicent の3人が Pat より立場を占め、これに対してシニカルな傍観者の役割を演じ通す筈であったイギリス人 Christopher が蜂起のさなかに狙撃兵の銃弾に倒れ、Barnabas の古代アイ

ルランド研究の忠実な助手であったその娘 Frances は求婚する Andrew をふりすてて、紛争のアイランドを脱出し、20年後のイギリスで Epilogue の場をつくり上げるといった形になっている。つまりアイランド独立という一つの Cause に対する姿勢において、Protestant としての立場からの批判者 Hilda、母親と Christian としての立場からの批判者 Kathleen、立ちおくれたぶざまな敵対者 Andrew、遊び半分の参加者 Millicent、怠惰な参加者 Barnabas、盲目的な支持者 Cathal、蜂起を契機に衝動的な参加者となる本来は傍観者の Christopher、のち脱出して解説者となる元来は熱烈な支持者の Frances という8人の人間がただひとりの直接の参加者 Pat を軸として復活祭当日に向って混然と動いてゆくのである。アイランドの守護神 St. Patrick にちなむ名前のこの孤独な青年が Connolly の市民軍よりも義勇軍をえらんだと云うのも同名の義勇軍司令官 Patrick Pearce に傾倒したためなのであるが、自ら云うごとく、彼が彼自身とアイランドしか登場しないドラマを演ずるつもりだったとすれば (There were in his drama only these two characters, Ireland and himself. p. 81)¹、残りの8人はくらく背景幕にとけ込んでしまう影絵の人物となるわけであろうし、彼にとってアイランドはひとつの人格でも、描写出来る対象でもなく、自分自身の分身のようなものであったとすれば (The Ireland which he loved was not personified or described, it was the refined, purified counterpart of his own Ireland. p. 87)、彼 Pat は St. Patrick に導かれつつ8人の罪を背負って神に仕えるという monodrama を演じていたともいえよう。

ともかくも、その母 Kathleen の本能的な母性愛、実父の妹であり、母の実兄の妻であるという二重の伯母 Millicent のまさに incestuous な愛、20年後の Epilogue に到ってはじめて明らかにされる従妹の Frances の抱く純粋な恋、弟 Cathal のはげしい兄弟愛、従弟の Andrew の示す反撥と執着をないまぜた homo-sexual な愛、義父 Barnabas や叔母傭のイギリス人 Christopher のもつ敬愛の情など、Pat は丁度自分とは反対の極に立つ

Hilda をのぞいてすべての人に愛されていて、しかもそのどの愛にも決して応えることがないままにドラマのピークとなる復活祭の朝、殉教の死を遂げてしまうのである。

一方こうした一方交通の形で Pat に向けられた、つまりは Pat を通して Ireland そのものに向けられたさまざまな形の愛とその渦の中心となる Pat といちじるしいコントラストをなすものは Millicent と彼女が招き寄せる incestuous な愛の諸相であろう。“A great beauty” と呼ばれた Janet Selborne-Doyle の John Richard Dumay との最初の結婚によって生まれた彼女は、母親の美貌をうけつぎ、はじめはアイルランド貴族の Sir Arthur Kinnard と結婚したが、子供なくして夫と死別し今は気儘な未亡人暮らしを楽しんでいる。相当に“fast”な彼女といえども元来は夫の Arthur をやはり愛してはいたのであるが、(“You know, Christopher, I did love Arthur. A lot of people thought I didn't but I did.” p. 102), 復活祭の日の昼前、つまり蜂起の寸前に明らかになったように、彼女は母親 Janet の Arnold Chase-White との二度目の結婚で出来た一人息子、つまり異父弟である Henry Chase-White と “a certain relationship” (p. 300) を持つようになり、ついで Hilda の弟で Catholic に改宗して神学大学に通っていた Barnabas をただ瀆神の情熱を修業中の神父に掻き立ててやりたいというだけの理由から誘惑して墮落、棄教せしめ、彼が亡兄の妻 Kathleen と結婚したのちもなお関係をつづけている。一方、亡夫のなき実妹の夫であった Christopher Bellman と関係をつづけながらその求婚を拒み通すのであるが、財政的援助のために応諾しようとしていた矢先、異父弟の一人息子である Andrew と bed を共にしているところへ、かねてから執拗に誘惑していた Pat が踊り込み、一部始終をいつものようにおこぼれにあづかろうとうろついていた物陰の Barnabas に全部聞かれてしまうという、つまり彼女をめぐる甥二人、義弟二人が一夜のうちに鉢合せをするという“bed farce”が演じられてしまう。彼女が誘惑したなかで結果的に不成功であったのは Pat

ただひとりという事になるわけであるが、作中のすべての男性を誘惑した反動として、すべての女性に本能的に忌避される存在となっている。つまり、すべての男性をさそってすべての女性に嫌われる sex にとりつかれた Millie はすべての男性とすべての女性に愛されてその尽くを却ける Cause にとりつかれた Pat と強いコントラストをなして、一つは使徒パトリックを通してアイルランドに結び付く national consciousness の渦となり、一つはアイルランド全土にちらばる Anglo-Irish 相互間の incestuous love の渦となって、いやそれどころか二つは一つに合体してアイルランドそのものをも巻き込む巨大な incest の渦となって、その中に homo-sexual な incest や impotence, 純粹の carnal desire や無償の sympathy をもまじえつつ、1916年4月23日朝その破局を迎えるのであった。

ところでこうした異常な愛のかたちと複雑にからみ合う人間関係はまさに作者 Murdoch の得意の世界というべきところであろうが、では彼女はただその事を述べるためにのみ、ただそのカレイドスコープの場としてのみにアイルランドという場所を、そして Easter Rising という時期をえらんだのであろうか。革命にからむ immoral な人間関係といういづれにせよ hot な状況と、それを支えるアイルランドという hot な舞台を突き離して見るイギリス側の cool な眼が Epilogue に用意されているが、25章からなる本文の世界から脱出して Epilogue をととのえる Frances の存在は解説者の役割をもになっており、ここに作者 Murdoch の姿を見る見方もある。およそ immoral な愛の濁流のなかで、Andrew の求婚を却け、Millie に本能的に反撥して来た彼女の Barnabas に対する無償の好意だけが一脈の清冽さをたたえる清水であったものが、Millie と Barney の関係を知り、密告の手紙をかいて父 Christopher と Millie の関係を破壊しようとした Barney の陋劣な心情に一瞬のうちに幻滅して特志看護婦として働くべく Ireland を去り、20年後に反アイルランド的なイギリス人の夫と親アイルランド的な息子と対話しつつ、幕の降りたあとのまとめの口上役をつとめるのであるが最

後に洩らす戦死した Pat に対する押え難い思慕の想いが、つまりは Ireland に対する ambivalent な、20年を経てまだポッカリと傷口をあける生々しい怨念が、一連の事件の立会人としての機能以上の、何かはげしい commitment を示しているのである。何物かに幻想を抱いては最後に幻滅してゆくというのは Murdoch の小説にみられる一つのパタンであろうが²、この *The Red and the Green* の場合も Ireland 独立という Cause を抱いてコミットし Easter Rising の無惨な失敗によって幻滅するというふうに見えるのであるが、そこに又、幻滅したゞ挫折し去るのを拒否する何物かがあるようにおもわれる。Harper 誌の authoress の compassion と warmth がここに見られるという指摘³をまつまでもなく、Frances の姿に投影されている作者自身をも含めて、幻想―幻滅のパタンの外側でなおアイルランドの Cause を人々は叫んでいるのである。第一、量的にみても復活祭蜂起の経過こそごく手短かにしか述べられていないにせよ、この一族の間にかわされる独立運動そのものをめぐる discussion たるや相当なものであり、今もし作者が深い愛情をもって示すみごとなアイルランドの風物と雨との描写がなかったならば、まさにこの作品は義勇軍、市民軍内部の理論武装のためにつくられた学習用テキストとしての想定問題集とみられかねないほどの微に入り細に穿った議論が実にさまざまな角度から展開されているのである。つまりは Anglo-Irish の人々の national consciousness が作者自身のそれをも含めて、conservative な Unionist から radical な Nationalist に到るまでまさにスペクトルの配列を見せてここに示されているのである。

Andrew の母親 Hilda はイギリスサイドに立つ Protestant の Anglo-Irish の立場を代表している。Sentimental な Irish の被害者意識を嘲笑し、又イギリス陸軍将校を息子にもつ母親としても、世界大戦という異常な事態の下での radical な人々の戦争非協力をなじり、街々で見かける Irish の人々の親独傾向を怒り、はっきり Unionist の立場に立っている。彼女の義妹 Kathleen は Catholic に改宗したこともあって、イギリスサイドに立つて

radicalism に批判を加えるというよりは Christian の立場から非暴力の原則を貫き通そうとし、又 radicalist 二人を息子にかゝる母親としても、事の是非よりは流血の愚を説いて止まない。一方 Millicent は性に対して anarchy であったごとく、まことに衝動的に奔放に革命に共感しコミットしようとする。1910年代という時代にズボンをはきピストルの稽古をし、ブーア戦争には特志看護婦として従軍した経歴をもつ行動派の女性であり、今日革命にコミットする女性のいわば原型でもあろうが、前二者の平均的なタイプと異なり、当時おそらくあまり類例のなかった種類の女性であろう。Frances は又、純粋で良心的な若い女性にあるように、真面目に突詰めてアイルランドの Cause を考え、父と叔父の影響から Ireland の虐げられた歴史に深く共感し、radicalist の Pat に強く惹かれる反面、イギリスの敵はアイルランドの味方であるとする extremist の参戦協力拒否、親独傾向にも共鳴出来ず、紛争の場からのがれて、かつての Millie の如く特志看護婦としてアイルランドを去る。この立場はその意味では Anglo-Irish の正義感の強い未婚女性のタイプを代表しているといえよう。

さて、こうした四人の女性と違ってより強く行動面での意志決定を必要とする男性の場合の commitment はさらに複雑である。Barnabas は Catholic に改宗し、神学大学へすすみ、Millie の誘惑にあって棄教したとは云い条、惨めに失なわれた青春の追憶からも、やみ難いアイルランドへの執着を抱いて拳銃の名手でアル中の破戒僧という役割をとにかくもこなしてゆく。Christopher は生粋のイギリス人ながら Anglo-Irish の女性との結婚から意識においては pure Irish であり、cynicism に陥晦しながら、結局は理性的判断をこえる衝動から最後の瞬間に蜂起の現場にとび込んで生命をおとす。Pat は外見上は radical Catholic の典型で義勇軍大尉として蜂起の朝戦死するが、その弟 Cathal となると兄よりはさらにより直線的な行動派タイプであり、今日の radicalist の原型を見る思いがするが、蜂起当時まだ14才の少年であったことから兄の手によって参加を暴力的に阻まれるが、4年後の19

20年の内戦で殺されてしまう。

そうすると残る Andrew の立場というものはイギリス陸軍将校でありながら肝腎の紛争を事前に知りつつ結局何も出来ないという、いよいよぶざまで滑稽なものとなるわけであるが、Ireland に潜在的に惹かれつつ、Frances をつれて脱出しようとして果さず、大陸での戦斗で戦死をしてしまうのである。

こうして見ると、ここに上げられた9つの行動のタイプの中には、それぞれ Catholic と Protestant, イギリスとアイルランド, Unionist と Nationalist, conservative と radical といった対立要因がきわめて複雑に重なり合ってそれぞれの意識を形造っていることがわかる。Protestant で Unionist で conservative なイギリスびいき, Catholic で Nationalist で radical なアイルランドびいき, という両極のタイプは Hilde と Pat だけであり、その彼等とてもどちらも Anglo-Irish であって、Hilde が English, Pat が Irish という截然とした対立の図式にはなりえないのである。いつの時代に來島入植したかという時期によって、Old English とか New English という言い方はしても純粹の Irish というものはアイルランド貴族の中でも殆どあり得ず、又この島での古い家柄の純粹のイギリス人というのも実際には殆ど存在しないわけである。Hilda が “We Anglo-Irish families are so complex.” と云い、Millicent が “We’re practically incestuous.” (p. 12) というのもその辺の事情を物語っているものであろう。

今これと同じ1916年のEaster Rising を背景とした Sean O’Casey のドラマ *The Plough and the Stars* (1926)⁴に見てみよう。主人公の Jack Clitheroe は市民軍の大尉で、義勇軍大尉の Pat と相通ずるタイプであり、Catholic で radical な Nationalist の立場を代表している。その隣人の果物売り Bessie Burgess は Protestant で conservative な unionist であり、Hilda の立場と同じであるが、後半の humanistic な行動はまた Kathleen を思わせるところもある。ところが、Willie に Cathal の面影を見、Stoddart 伍長や Tinley 軍曹に Andrew の一部の職務を見ることは可能であろうが

はっきりしていることはここには Christopher も Barnabas も、又 Millicent も Frances も出てこないという事である。このごみごみした共同住宅や酒場を背景にした O'Casey の世界には、練瓦工、組立工、大工、或は鶏肉屋、果物売り、雑役婦、娼婦といったアイルランド土着の裏通りの人々しか住まず、ゲール語研究者も古代教会研究者も、ましてや奔放に笑う貴族未亡人も存在の場をもたず、Frances のように逃げてゆくところもない人々が、結核で死んだ少女と流れ弾に殺された雑役婦を弔らって、夫の戦死も知らずに狂ってしまった新妻をあやしめながら、アイルランド独特の通夜 wake を始めようとしている世界なのである。

つまり、Murdoch の舞台は the red (イギリス陸軍の制服) と the green (アイルランド義勇軍の制服) という標題がいみじくも示すように Anglo-Irish の世界であり、O'Casey のそれは鋤と星 (アイルランド市民軍の軍旗) という title が象徴する土着の Irish proletariat のすむ Dublin という事になるのであるが、今、Ireland 独立問題という cause に対する national consciousness という観点からみれば、native Irish proletariatこそ登場しないにせよ、Murdoch の小説のほうが O'Casey のドラマよりもさらに分析的であり、右から左までさまざまな意識の形態分類がそれぞれの人物に代表せしめられて配列されていると云えよう。

よく云われる事であるがアイルランドの Catholic churches はその長い歴史において、必ずしも進歩的な役割をになって来たわけではない。Frank O'Connor⁵ が指摘するように、1850年頃には Vatican はアイルランドをして国教を奉ずるイングランドに対する前進基地たらしむべく民族意識やゲール語をなるべく捨てさせる方向で指導を行なっている。それだけならば中央統制に馴染まぬ地方教会の地方色払拭という形の、いわば五世紀以来つづいて来た Vatican の政策といえるであろうが、問題は Irish nationalism を快しとしない Westminster と手を握って、Ireland におけるすべての固有文化保持の動きを弾圧しようとさえしている事実である。現在でも、Ulster

地方に見られるように、かならずしも Catholic が Nationalist であるとは限らないという事実も、問題の複雑さを裏書きしているのであるが、これを逆に云えば Christopher がいみじくも指摘するように、アイルランドの偉大な愛国者は Daniel O'Connor をのぞいて、皆 Protestant であり、多くは又入植者の子孫であったという事実である。Wolfe Tone も Charles Parnell も Robert Emmet もクロムウェル植民の子孫であり、John Redmond はノルマン系地主の子、William O'Brien はアイルランド貴族の子であり、Parnell は母がアメリカ人、現アイルランド共和国大統領 Eamon De Valera のごときは元来ニューヨーク生れのアメリカ市民ですらあったのである。作中に散見するこれら revolutionist のなかで James Larkin と James Connolly の二人がわずかに小農民の子であり、残りはむしろ Protestant bourgeoisie の出身というべきであろう。

つまり、Christopher のように純粋の English ながら Irish よりも too Irish な enthusiast もあり、Kathleen のように Catholic ながら反 separatist もあり、結局は Andrew が云うように、或はそれは紋章や帽章のような実質よりも形の問題である (p. 5) かも知れないのであるが、何れにせよ、民族意識において自らをどう規定するかという問題は genealogical chart よりもむしろ自らがえらびとる自覚の問題であり、又こうした場合の政治的態度というものは必ずしも、宗派、人種、地理、階級によって図式的に決定されるものではないことが Murdoch の分析によって明らかとなったわけである。

しかしながら、逆に O'Casey の描く裏通りにあって Murdoch の描く屋敷町にないものは経済の問題である。成程破産寸前の貴族の未亡人はいるが彼女は優雅にその状態をたのしんでおり、金持ちの Christopher は別としても、Barnabas に到ってはその無為徒食が何故に可能であるのか全く不明であり、弁護士事務所勤める Pat ですらが一向に金に困っている様子はなく、そもそも複雑に入れまじる incest そのものが喰うに困らぬ人々の倦

意の遊びでしかないとすれば、それは硝煙の漂う Dublin の裏通りにふさわしいテーマであろう筈はなく、そうだとすれば、蜂起をめぐるはげしい賛否の緊張関係も、この Anglo-Irish の一族の間では Pat や Cathal をも含めて Millicent の気まぐれな commitment と同じく高価な遊びであるか Andrew のそれのような滑稽な漫画でしかないのであろう。

けれども、ではこの復活祭蜂起が何のために、又誰の名において行なわれたのか、と云えばそれは決して遊び半分の Millie や飲んだくれの Barney のために Anglo-Irish bourgeoisie の名において行なわれたものでは決してなく、やはり裏通りの共同住宅に住む練瓦工や雑役婦や大工のためにアイルランド人の名において行なわれたとしか云いようはないのである。アイルランドには「純然たる歴史上の不幸」(p. 35) がいくつも重なり、「天使も地団駄踏む」(p. 209) 程の不運の連続があったにせよ、そのために苦しめられて来たのは宗派、人種にかかわりなく常に低所得者層であったという事は厳然たる事実であろう。そうだとすればこの視点を全く欠いた Murdoch の分析はつまるところ Frances に象徴されるいわば出入り自由の異邦人の眼からのものでしかないのではなからうか。作者自身のこの作品に寄せる特別の愛着はさておき、作中の折角の膨大な議論は結局はある context からの主観的抜萃に止まっているように思われてならない。

第一にここに出て来ない極めて重要な動きは Hilda の発言に示される保守的な見解よりさらに右の、極右の反動勢力のそれである。Ulster Volunteers は自治法案に反対して1913年に Belfast で結成され、その数11万と称したが、実は Pat の加わった Irish Volunteers はむしろこれに対抗して、いわば防衛的に誕生した組織であり、多くのリーダー達はくり返し極右の反動勢力に対する専守防禦である旨声明している。元来北部の Ulster 地方では産業革命以来イギリス産業資本とむすんで造船業、リネン工業が発達し、農業以外見るべき産業をもたない南部といちじるしい対照を見せて来たのであるが、このことは南部26州の1949年の完全独立以後も基本的にはかわらず続

いている状況であり、アイルランド紛争が一つにはイタリアと同じく南北問題であるという側面がここに見られるのである。そうして、Pat が参加をためらった Connolly のひきいるアイルランド市民軍というのも又、こうした北部 Belfast の極右勢力を背景とした Dublin の経営者連盟が各工場で先制的にロックアウトに出たのに対抗して行なわれた1913年の大ストライキの結果として、階級的課題と民族的課題とを合わせ追求する広範囲な市民組織として生まれたものである。

元来解放された植民地に残存する旧勢力はその旧宗主国の政策よりも反動的になるというのが一つのパターンであり、アルジェリア独立前夜の Pieds noirs と呼ばれた colon の人々や、ローデシアのスミス政権のような孤立的な反動勢力のヒステリックな攻撃が現在の北アイルランドの紛争の直接原因ともなっているのである。従って1916年の Easter Rising がよし南部の Dublin で起った事件であるにもせよ、それには南北問題を背景にした北からの反動的な先制攻撃が一つの誘因となっていること、および、それをふまえた階級的な利害意識が結局は Dublin にいる Protestant の Anglo-Irish bourgeoisie の言動を動かしているのだという指摘が当然なされなければならぬまい。

今一つは大衆の脱革新現象の問題である。救い難い大衆の無気力、無感動、無関心はすべての革命家を悩ませた大きな障壁の一つであるが、蜂起の失敗のあと処刑を前にして Pierce や Connolly が痛憤の想いで縷々訴えているのも実にこの点であり、それは又 O'Casey をして劇中の人々に語りしめている怒りの言葉であり、James Joyce をしてアイルランドを去って永遠の expatriate たらしめた問題でもある。加うるに運動内部の絶えざる対立、分裂、内紛がどれ程貴重なエネルギーを空費せしめたことであろうか。終章にあたる蜂起そのものを描写した第二五章においても、無感動な反応しか示さない大衆の姿が克明に描き出されている。問題は Murdoch が怠惰な日常性のなかに埋没し切った一般大衆の鈍い response を単に示すに止まったの

に対して、W. B. Yeats はその詩、“Easter, 1916”⁶の中で、そうした無名の灰色の群衆の一部が抜け出して、問題を提起し、困難を排して前進し、遂には殉教の死を遂げる栄光をうたい上げているのである。もとより、この蜂起には当初からかなり批判的であったといわれる Yeats が興奮のあまり手放しでこの「愛国的行為」をたたえているわけではない。むしろ感情を押えた淡々たる口調で革命内部の矛盾も、その愚かしく衝動的な無計画性も充分にふまえた上で、純粋に理想的な行為が一たび動きはじめるや、個人のささやかな正義感や日常的な人間関係を捨て去る痛みなど、すべてを呑み込んでしまうその冷酷非情をかなしみ、そうした運動のメカニズムのなかで人々がその死によって、それまでの滑稽にもおろかしき役割をすてて (“He too has resigned his part, In the casual comedy.”) 変身し、“Transformed utterly.”) そこに栄光の美が生まれる (“A terrible beauty is born.”) 事を示しているのである。

では最後の革命につきものの by-standers' cynicism の問題はどうかであろうか。Epilogue において Frances はイギリス人の夫が語るシニカルな批判に太刀打ちしかねて、半ば肯定しながら、なお最終的な評価をためらっている場面があるが、この Easter Rising についての評価はその直後はさておき、Epilogue が設定されているスペイン内乱さなかの1938年には、ましてこの作品が執筆された1965年にはすでに定まっていたと見るべきではなからうか。現在なお北部 Ulster の Belfast や Derry を中心に行なわれている北アイルランドの暴動は公民権運動の形で I R A の反英武装闘争を伴って1968年に再開して以来、爆発的に世界の注目を集め、いわゆる第三世界の民族解放闘争に連帯する内国植民地の問題として、古い歴史にまで溯ってさまざまな角度から論じられるようになったのであるが、そうしたいわばアイルランド・ブームが始まる直前にあたる1965年においてさえ Easter Rising をめぐり問題の結論はほぼついていて見えてよい。例えば第8章で Cathal は兄に向かって Lenin の言葉を引用している。

“Whenever it’s the turn of a country, however small, to rise against its tyrants, it represents the oppressed peoples of the whole world.”
(p. 123)

これは蜂起寸前の状況に照らして引用されて不自然ではない発言であるが全く同じ文句を22年後の1938年に設定されている Epilogue のなかで Frances の息子が引用するとなると、単なる精神主義的な決意表明としてかえって cynicist の反発を招きかねない。同じ引用を反覆せしめたのは Frances が息子に Cathal の面影をみるための小説的技巧のためであろうが、論理的には蜂起終了後22年という時点では同じ Lenin の「自決に関する討論」のなかの「1916年のアイルランドの蜂起」という一文からこそ引用すべきであったとおもわれる。Lenin はこの蜂起を盲動だときめつける人々に反論して「科学的な意味で盲動といえるのは蜂起の企てが陰謀家またはばかげた狂信者の一サークルのほかにはなにも明るみに引き出さず、大衆のうちになんの共鳴も呼びおこさないようなばあいだけだ」と言い、「ヨーロッパにおけるプロレタリアートの蜂起がまだ成熟していなかった時」に事を起したのは「アイルランド人の不幸」であったかも知れないが、「時機を得ない、部分的な、分散した、したがって不首尾な革命経験」の畜積によってのみ「大衆は経験を得、教訓を学びとり」、最後には「総攻撃の準備をととのえる」⁷と述べている。およそ準備万端整い、時機又よろしきを得た暴動などあり得ない以上、そして又、いかに精密な情勢分析といえども、行動を起すものの主体的な働きかけによって必ず変化するものである以上、この Lenin の分析評価はむしろきわめて常識的なものであり、cynicist の饒舌を充分沈黙せしめるに足るものであろう。

おもうに Murdoch のアイルランド観の根底には宗派的、人種的、階級的地理的な factor をこえる一つの哲学的態度があるように見うけられる。彼女は *Against Dryness*⁸ の中で、乾燥性をあしき romanticism の属性としてあげているが、これは T. E. Hulme の考える非生命的、幾何学的な線の

堅さをあらわす *dry hardness* などという概念とは異なり、主観性への埋没と創造性の不毛を示すものようであるが、その不毛は一つには作家が抱く他者の存在を没却した唯我性から来るものと分析されている。こうした考えからすればアイルランドの *Catholicism* はその前近代性、反進歩性、地方性、権威主義、反知性主義においてまさに不毛の状況を示しているといえよう。

もともと五世紀にドルイド教と争ってこの島にキリスト教を定着せしめた聖パトリックの基本方針はゲール文化をローマ化することではなく、キリスト教をゲール化することであったといわれている⁹。こうした地方色の濃いキリスト教は、全法王中たった一人のイギリス出身であるアドリアン四世によって、プランタジネット王朝の創始者ヘンリー二世に勅許によってアイルランド全土が与えられた時からそもそもの不幸が始まり、ヘンリー八世が断行した宗教改革——ローマとの絶縁に際しても、イギリスの敵はアイルランドの味方という見地からも *Hilda* の指摘する¹⁰ ようにはイギリスと行を共にする事もならず、さらに17世紀、神の軍隊であり、前近代性からの解放の使者であった筈の *Cromwell* の軍勢からさえ得たものは虐殺と弾圧と悪名高きクロムウエル植民だけであったという、まさに天使も地団駄ふむ程¹¹ の不幸の連続であったわけであるが、カトリック教会も又、前述したように屢々判断の誤りから間違った動きがあり、その事が例えば *O'Casey* のような *Nationalist* 達をつよい反カトリック感情をかきたてる原因ともなっているのである。

又、国家の上の超越国家である *Vatican* を拒否しようとしたイギリスの *nationalism* に支えられたヘンリー八世の宗教改革を否定するアイルランドの姿勢には、敵の敵を味方とする論理以外に、全欧にわたる国際機構である *Catholic church* に属するという *international* な意識があった反面、その中央集権的超越的統制に対する反発から、さらに反ローマ的土着性が再確認され、同じ反集権的体質をもつ東方正統教会との類似に激励されて、独特の *nationalism* を育てて来たのである。

その意味ではこの意識は本来歴史的にも専ら防衛的なものであり、self-assertive ではなく self-defensive な側面をもつものといえよう。G. Orwell は *Notes on Nationalism* の中で、アイルランドやスコットランドのナショナリズムを、「過去の偉大さに対する信仰」であり、「サクソンよりもより創造的で素朴だとする」意識であり、それはさらに“powerhunger”であると規定しているが、アイルランドの場合は、むしろ彼が「本来的に防衛的なもの」とする“patriotism”¹²に属することになる。それはともかく、こうした少しも攻撃性をもたない軍事的にも文化的にも防衛的な nationalism にもかかわらず、アイルランドの Catholicism は、その前近代性と反進歩性のゆえに、ことさら近代化を誇り、進歩を旗印とした protestant の完膚なき攻撃をうけることとなった。カトリック教会のもつ権威主義と反知性主義とプロテスタント教会のもつ平等主義と啓蒙思想は実際の生活の場では非能率と能率、怠惰と勤勉という形をとって、さらにそれが現実の経済機構の中では未熟練工と熟練工、乃至は労働者と経営者という形の対立となり、まさに Max Weber の分析するようにプロテスタントの倫理が資本主義の精神¹³を支える結果、こゝアイルランドでは protestant—bourgeoisie—conservative—unionism 対 Catholic—proletariat—radical—nationalism という図式が成立したわけである。

この分析において、international なもの、近代的なもの、一見進歩なるもの、勤勉なるもの、を拒否して、唯我的に独自のもの、一見前近代的、退嬰的なものを守ろうとする立場を果して何人が非難出来るであろうか。擬制としての国際機構、勤勉という名の収奪、近代化の名における非人間化、進歩という名の破壊に抵抗する姿勢の中に、大国主義と対決する第三世界の立場があり、怠ける事の権利があり、破壊されようとする“人間的なるもの”を死守しようとする決意があり、管理し統制される事を拒否する姿勢が生まれて来るのではなからうか。それは頑なにまで solipsistic であることから始まる筈である。

学生時代に “I am very left-wing”¹⁴ であったという Murdoch が、まさか Grey 総督の秘書としてアイルランドに赴いた Edmund Spenser のように武力と威嚇による徹底的弾圧を唱える¹⁵管もなく、またクロムウェルに派遣された William Petty のように植民政策上 “transmuting” を最良の策とする事もないとすれば、その点で単なるウィッグ史観に立つことなく、Irish nationalism に対して今一步の洞察をと望むのはあながち望蜀のことばかりでもあるまいとおもわれる。

注

- 1 Iris Murdoch; *The Red and the Green* (New York: The Viking Press, 1965)
以下頁数のみの記載は同書を示す。
- 2 野中涼 「I・マードック」(今日のイギリス・アメリカ文学: 研究社)
- 3 *Harper*, Nov. 1965.
- 4 Sean O'Casey, *Collected Plays*, Vol. I (London: Macmillan, 1952)
- 5 Frank O'Connor, *The Backward Look* (London: Macmillan, 1967), p. 155.
- 6 W. B. Yeats, *Selected Poems* (London: Macmillan), p. 171.
- 7 レーニン全集, 第20巻 (東京, 大月書店)
- 8 Iris Murdoch “Against Dryness,” *Encounter*, No. 88.
- 9 掘越智 「アイルランドの反乱」, (東京: 三省堂) 序章
- 10 I. Murdoch, *op. cit.*, p. 36.
“If only Ireland had followed England at the Reformation.”
- 11 I. Murdoch, *op. cit.*, p. 209.
“The history of Ireland was such a tale of misery and wretchedness, enough to make the angels howl and stamp their golden feet.”
- 12 George Orwell, *England your England* (London: Secker & Warburg, 1954),
“Notes on Nationalism.”
- 13 Max Weber, “Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,” (岩波文庫, 133. 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」)
- 14 “I was very much involved in politics and student organizations. Well, I am very leftwing, and I was as a student—students are usually very left-wing anyway.” (*The Study of English*, Apr. 1969)
- 15 “It is soe but yeat wheare no other remedye maie be devised nor no hope of recouerie had theare muste neds this violente meanes be vsed.” “A View of the

Present state of Ireland," *The Works of Edmund Spenser* A Variorum Ed. Vol.
10.

Synopsis**Irish Nationalism—Iris Murdoch's *The Red and the Green*—**

Bin Miyai

Iris Murdoch's *The Red and the Green* (1965) is a novel on some Anglo-Irish families connected with each other through complicated incestuous love. Its stage is set in Dublin. The time is just before the so-called Easter Rising, April, 1916. Incest itself is one of the authoress' favourite themes as an abnormal expression of love.

Her descriptions of the kaleidoscopic situation set in the rain-cleansed beautiful landscape are as usual delicate and subtle. One can enjoy the scenic beauty in and around Dublin, a good guide for sightseeing. But did she choose the Irish rising in Dublin only as a setting against which those labyrinthine human relations were to develop?

Murdoch, herself Anglo-Irish, and a left-winger when a student, had a personal motive to commit herself to Irish problems. There seems to be more than a writer's detachment, i. e. an attachment to be a member. Her attitude, however, is not adequate enough with which to tuckle the complicated Irish political and national situation. So, although patterns of national consciousness of the Irish people are well classified and explained, still her analysis would not really make her or you a participant in the Irish affairs. Many important factors and causes are not treated in this fiction. It may be that this is not the worst but by no means the best novel of hers, as some book-reviewer puts it.

In spite of the authoress' particular love for this novel, this is a work in which she shows incomplete detachment and insufficient attachment.